

称名念仏について

同胞行者 世の雑音に迷うこと勿れ ー

和讃のこころ

「弥陀の名号となへつつ

信心まことにうるひとは

憶念の心つねにして

仏恩報ずるおもひあり。」

「誓願不思議をうたがひて

御名を称する往生は

宮殿のうちに五百歳

むなしくすぐとぞときたもう。」

此は聖人の御製作にかかる三帖和讃三百幾十首の和讃に於ける、いわゆる序讃でありまして、特に巻頭に掲げられたものであります。

聖人が和讃を遊ばすみ心は、仏徳を讃嘆して、仏恩を報謝し給わんが為であります。同時に他力真宗の何であるかを示して、大悲伝普化の為、特に容易い和語によつて愚かな者を導いて、仏の本願念仏を領解して、正しい信心に任せしめんが為であります。

この巻頭の二首の御和讃は、一は正しい浄土真宗の念仏の世界を示され、一つは権一仮の世界にとどまつて疑惑のままに念仏しているのを戒められたのであります。

蓮如上人が「御一流には、他力信心をよくしれとおぼしめして、聖人和讃にその意をあそばされたり。」（御一代聞書）と仰せられたが如く、信心成就すべく、疑惑誠むべきをお諭し下さったのであります。

弥陀の名号となえつつ

「弥陀の名号となへつつ 信心まことにうるひとは、憶念の心つねにして 仏恩報ずるおもひあり。」

弥陀の名号となへつつ………「つつ」と言うのは、「称えて」又は「称えながら」ということであ句ます。何故にまず「弥陀の名号となえながら………と最初に出されたのでありましょう。

憶うに元祖法然上人は、すでに浄土真宗を開き、自らも念仏往生を期し、人にも念仏往生の大義をすすめ、弘通せられました。これ聖道門の諸行に対するに、浄土門の念仏の大成を示されたのでありまして、行を表にお説きになったことも亦当然でありました。

然るに、同一の教えを受けて念仏する人々の多くは、「称えながらも」称える名号の謂れを知らず、自力疑惑の心を以つて念仏しているものが多かつたのであります。その自力疑惑のこころは、時には、念仏も何も捨ててしまうのでありましょうが、往生を願う心あるものは、称名の功を募り、称えた力によつて往生しようと計らうに至つ

たのであります。それは誠に上人の教旨に徹底しないものであります。又、中には、念仏が唯一絶対の行たることを知らぬが為に、何時しか、上人が廃捨された諸善万行を許し、それを列べて念仏することを許した人もありました。

かかる人は、全て上人の教旨に徹底しない人であります。ここにおいて我が聖人は、浄土真宗の真意を光闡し、教えの真髓を伝え、以って念仏往生の真実義を開顕せられたのであります。

両聖の伝承と誤解

「弥陀の名号となへつつ」

聖人は決して法然上人の念仏往生をいけないと捨てられたのではない。法然上人の念仏往生の教えをそのままに領解して、信心成就し、御自身も亦、念仏往生の願を全うじられたのであります。真実の念仏往生を成就せられたのであります。

師の教えを訂正されたのではない。師の教えを真に受けられたのである。師の教えで足りなかつたのではない。師の教えによつて満され、師の教え通りに、念仏申されたのであります。そこに、信心が光つておつた。

「弥陀の名号となへつつ、信心まことにうるひとは……………」

称えつつも疑いをさしはさみ、称えつつも信心なくして、唯師の御房の口真似をする。それでは真の念仏ではない。真に念仏するとは、念仏がそのまま信心を成就していることであります。

2

然るに、浄土真宗は、何時しかに、悲しむべき誤解を聖人の教えの上になげかけました。それは信心正因の教旨は、法然上人の教旨を訂正されたものだと考えたり、或は、法然上人は、念仏によつて浄土宗を開き、我が聖人は、信心によつて浄土真宗を開かれたので、両聖の教えは全く異つたものであり、その間には超えることの出来ぬ溝でもあるかの如く思うに至つたことであります。何たる甚だしき誤解であろう。聖人は、和讃の源空章において、

「智慧光のちからより

本師源空あらはれて

浄土真宗ひらきつつ

選択本願のべたもう。」

「善導・源信すゝむとも

本師源空ひろめずば

片州濁世のともがらは

いかでか真宗をさとらまし。」

と讃嘆されました。聖人にあつては、全く浄土真宗を日本国土に開顕せられた方は、師法然上人であつた。

然るに、ある地の僧侶は、「法然上人迄は聖道門を教えられたのであり、親鸞聖人がはじめて他力信心を開かれたのである。念仏申せというが如きは、法然上人の教えで

あつて、聖道門の自力であるぞ。そのようなことに迷うてはならぬ。」と同行に向つておどしつけました。何というひどいでたらめであろう。

「弥陀の名号となへつつ 信心まことにうるひとは、

憶念の心つねにして 仏恩報ずるおもひあり。」

まことに本願を領解して信心獲得の人は、憶念の心相續して、仏恩報謝のおもいあり、信心相續するにつれて、称名念仏の相續となるのであります。これしかしながら、凡夫自力の声が尊いのではなく、弥陀の名号となえつつ「弥陀の名号が尊いのであり、それ故に、信心まことに獲るのであります。称名が念仏であり、念仏が信心の智慧であるのは、弥陀本願成就の名号なるが故であります。

観無量寿経の最後、流通分においては、

「もし念仏する者は當に知るべし。此の人は是れ人中の分陀利華なり。観世音菩薩、大勢至菩薩、その勝友と為りたもう。普に道場に座し諸仏の家に生ずべし。仏阿難に告げたまはく、汝よく是の語を持って、是の語を持つてとは、即ち是れ無量寿仏の名を持つてとなり。」とあります。

念仏行こそは一切の諸善万行を超えたる唯一絶対の大作たることを領解せしむることこそ、観経の持つ使命であります。而して念仏行が唯一絶対の正定業となるのは、特に如来の本願によるのであります。本願を領解することによつて信心を獲得します。信心こそは、念仏行を念仏行たらしめるものであります。

大無量寿経が尊いのは、如来の本願を広説せられたからであります。

3

蓮師の教化

蓮如上人の御教化は至りとゞいたものであります。御文章（三ノ四）には、

「しかれば、世の中にあまねく心得おきたるとはりは、ただ声に出して南無阿弥陀仏とばかり称ふれば極楽に往生すべきように思ひはんべり、それは大きに覚束なきことなり。されば南無阿弥陀仏と申す六字の体は如何なる意ぞといふに、阿弥陀如来を一向にたのめば、仏その衆生をよく知らしめして救ひ給える御すがたを、この南無阿弥陀仏の六字に現わしたもうなりと思ふべきなり。しかればこの阿弥陀如来をば如何して信じまいらせて後生の一大事をば助かるべきぞなれば、何の煩もなく、もろくの雑行雑善をなげ棄てて一心一向に弥陀如来をたのみまいらせて二心なく信じたてまつれば、そのたのむ衆生を光明を放ちてその光の中に撰め入れ置きたもうなり。これを即ち弥陀如来の撰取の光益にあづかるとは申すなり。または不捨の誓約ともこれを名くるなり。かくの如く阿弥陀如来の光明の中に撰め置かれまいらせての上には……………かよふの雨山の御恩をば如何して報じたてまつるべきぞや、ただ南無阿弥陀仏くと声に称へてその恩徳を深く報尽申すばかりなりと心得べきものなり、あなかしこく。」

声に出して南無阿弥陀仏とばかり称えてもそれでは覚束ないと言つた蓮師は、やがて「ただ南無阿弥陀仏くと声に称えてその恩徳を深く報尽申すばかりなりと心得べきものなり」と仰せられました。これ正しく、自力の称名から、他力の称名念仏への

方向を示されたものであります。而してこの「称えても駄目」の世界と、「称えてその恩徳を深く報尽申す」世界との間にさしはさまれた御文こそ、本願の領解を説かれたものであります。信心を顕わされたのであります。

誠に蓮師の御教化こそは「形を見れば法然、詞を聞けば弥陀の直読」であります。御一代の間、「いよく、弥陀如来の御恩徳の深遠なる事を信知して行、住、座、臥に称名念仏すべし。」（御文章三ノ八）

「その仏恩報謝のためには寝ても起きてもただ南無阿弥陀仏とばかり称ふべきなり。」（三ノ十）

「これ即ち第十八の念仏往生の誓願の意なり。此の如く決定しての上には寝ても覚めても命のあらんかぎりは称名念仏すべきものなり。」（五ノ一）
八十通の御文の殆んど全巻にこうした聖語がくり返えされてあります。

聖人の御教化とその日常

聖人すでに、信巻において

「故に真実の一心、是を金剛の真心と名づく。金剛の真心、是を真実の信心と名づく。真実の信心は必ず名号を具す。名号は必ずしも願力の信心を具せざるなり。」

と断定せられました。又この意を、『末燈抄』には、

「しかるに世間の忽々に紛れて一時もしくは二時三時怠るといへども、昼夜に忘れず御あはれみを喜ぶ業力ばかりにて、行住座臥に時処の不浄をもきらはず、一向に金剛の信心ばかりにて、仏恩のふかき、師主の恩徳のうれしき、報謝のために、ただ御名4を称ふるばかりにて日の所作とす。」

慶信御房の御日常、御念仏三昧の御生活も伺われます。日常、仏恩の高大を憶うて念仏三昧の生活をお続け遊ばしたのであります。

聖人が有阿弥陀仏におつかわしになつた御返事には、

「尋ね仰せられ候念仏の不審の事。念仏往生と信ずる人は辺地の往生とて嫌はれ候らんことおほかた心得難く候。その故は弥陀の本願と申すは「名号を称へんものをば極楽へ迎えん」と誓わせ給ひたるを深く信じて称ふるがめでたきことにて候ふなり。信心ありとも名号を称へざらんは詮なく候。又一向名号を称ふとも信心あさくば往生しがたく候。されば念仏往生と深く信じて、しかも名号を称へんずるは疑なき報土の往生にてあるべく候なり。詮ずるところ、名号を称ふというとも他力本願を信ぜざらんは辺地に生るべし。本願他力を深く信ぜんともがらは何事にかは辺地の往生にて候ふべき、このようをよくよく御心得候ふて御念仏候ふべし。この身は今歳きはまりて候へば定めてさきだちて往生し候はんずれば、浄土にて必ずく待ちまいらせ候ふべし。あなかしこく。七月十三日親鸞。有阿弥陀仏、御返事。」

私どもに下された御教として深く頂戴すべきであります。

「弥陀の本願と申すは、名号を称へん者をば極楽へ迎えんと誓はせ給ひたるを深く信じて称ふるがめでたきことにて候なり。」

信心ありとも名号を称えざらんは詮なく候。

又一向に名号を称ふとも信心あさくば往生しがたく候。」

念仏を辺地の業と危ぶむ者への極めて明白な御教旨であります。謹んで信心決定して念仏申すべきであります。

念仏申すこと

「草の庵に寝ても覚めても申すこと南無阿弥陀仏く」
五合庵の良寛さまのお歌でありましたか、如来の慈光のみなごった尊い風情がしのばれます

由来浄土真宗は、「寝ても覚めても念仏申す。」「行住座臥に時処の不浄をきらはず」金剛の信心に住してお念仏するところに、凡夫の救われて歩む尊さがあつたのであります。然るに、三業惑乱があつてからこのかた、自力の念仏をおそれるのあまり、お念仏申すことまでがいけないように考えはじめて来たのであります。あつものに懲りて膾をふくに至つたのであります。ある師は、浄土真宗の嚴退の因はここにあると言われました。

世には、寺院の住職でありつつ「近頃このあたりには、念仏申せと言うて来るものがある。御当流は信心一つじゃぞ。念仏申せ等と言うは全く異安心というものじゃ。迷わんようにせよ。」と高座から同行にやりつける人がたくさんあると聞きます。何という情ないことでありましょう。聞いている同行の頭にも、すぐ「末代無智の御文章」くらいは出て来ます。

5

「これ即ち第十八の念仏往生の誓願の意なり。此の如く決定しての上には寝ても覚めても命のあらんかざりは称名念仏すべきものなり。」
と頂いている者には、お寺こそ無茶を言っているのだと、寄りつかなくなります。寺には「称名正因」の異解者だと独り合点してたたくのであります。しかし△△老師は言われました。

「私どもでも、称名正因の異解者のように言われますが、今頃、法を説く者に、ほんとうに称名正因を正しいと考えている人などはいないでしょう。」

私も亦そう思います。称えた数に力を入れ、数を多く申したがいいなどと、そんなことを思っている者、称えなければいけないと、そんなに思っている人はいないでしょう。まことに行者、迷うことなく、聖人や蓮如上人のみ教え通り、信心決定して念仏申すべきであります。口にばかり称名したとて駄目だと言いつつ「このありがたさの弥陀の御恩をば如何して報じたてまつるべきぞなれば、ただ寝ても起きても南無阿弥陀仏と称えてかの阿弥陀如来の仏恩をば報ずべきなり」と仰せられたみ教えを真に頂いて念仏すべきであります。

念仏の因縁

さびしい山坂をこす時、お念仏の声のする人と会えば、心丈夫を感じます。汽車に乗って向側の人が信心の行者とわかれば安心して眠れます。念仏の声のあるところ、盗賊でなくて、生きたみ仏が在しますが故であります。

「仏法は一人居て悦ぶ法なり。」とは蓮師の御意でありました。一人居て悦ぶに至つて、初めて我がものになつたのであります。山に川に、一人働いている間にも、お念仏申される時、名体不二の名号なるが故に、如来撰取の大悲を憶念せずにはいられないのであります。

だがたとえ、世間からは時に称名正因の如く誤解されようと、それは大したことはありません。それよりも、もつと問題は、「これ即ち第十八の念仏往生の誓願の意なり。此の如く決定しての上には寝ても覚めても命のあらんかぎりには称名念仏すべきものなり。」とのみ教えの如くなり得ないで、又してもく解怠であることではありません。解怠、悲しむべく、懺悔すべきであつて、疑い危ぶむべきではありません。一念一刹那といえども、弥陀の願行の遍満したまわぬことなきことを憶い、出づる息、入る息も仏の離れたもう時分なきことを念じて、いよいよ念仏申すべきであります。

古来の聖者たちといえども、正道を歩まるれば、必ず物凄い嵐がつきものであります。でありますから、『歎異抄』にも、

「故聖人の仰には、この法をば信ずる衆生もあり、謗る衆生もあるべしと、仏説きおかせたまいたることなれば、我はずでに信じたてまつる、又ひとありて謗るにて仏説まことなりけりと知られ候。しかれば往生はいよく一定とおもひたもうべきなり。あやまた謗る人の候らはざらんこそ、いかに信ずる人はあれども謗る人のなきやらんともおぼえ候ひぬべけれ。かく申せばとて、必ずひとに謗られんとはあらず、仏のかねて信謗ともにあるべき旨を知ろしめして、人の疑いあらせじと説きおかせたもうことを申すなり。』

非人格や、不徳の為に非難されたり、謗られたのさえ、この御文を出して弁解するが如きは、許すべからざる邪道であります。沈黙して受け取るべきであります。しかし教通りの念仏行者なりとて、必ず謗られます。でありますから本師聖人は、御本典の終りに臨んで、

「信順を因と為し、疑誘を縁となし、信樂を願力に彰し、妙果を安養に顕さん矣。」と仰せられました。誠にくり返しく頂戴すべきであります。真に燃ゆる信の火は、疑いや謗りが縁となつていよく燃え上ります。本願力そのままの信樂をこれによつて彰わし、やがて安養浄土に大涅槃の証果を成就させて頂くことであります。世間の雑音に耳をかすことなく、念仏無碍の一道を行歩すべきであります。